

Kami Kami

～ 紙プロ通信 2008年度総括号 ～



2009.02.20 発行 / number 2

発行元：東洋大学 社会学部
社会文化システム学科

編集責任：小林正夫

〒112-8606

東京都文京区白山 5-28-20

TEL 03-3945-7439 FAX 03-3945-7626

“紙のネットワーク”確立へ、一歩前進

2008年12月6日、東洋大学白山キャンパス6号館6307教室にて、社会文化システム学科主催で第2回東洋大学地域連携シンポジウム「紙をめぐる地域とネットワーク 文京区を基点とする臨地教育の実践」を開催しました。本年度のシンポジウムは「文教区の印刷業とネットワーク」、「紙のリサイクルとネットワーク」という“ネットワーク”に着目したテーマで構成し、本学科のプロジェクトである「紙の総合学習を通じた地域連携（通称：紙プロ）」のメンバーと、学外の研究機関・事業者の方々が講演を行いました。

【地域からの発信】

今回も学生からの発表だけでなく、本テーマに係る様々な方に講演をお願いしました。どれも貴重なお話ばかりで、紙プロメンバーだけでなく、一般の方々からも大変好評でした。

特別講義では、阿部健一さん(総合地球学研究所 教授)に紙の材料である木材をめぐるポリティカル・エコロジー(政治生態学)について講演して頂きました。また内藤大輔さん(総合地球学研究所 研究員)からは地域環境班のテーマと密接に関わる研究を、五十嵐真子教授(神戸学院大学人文学部)からは地域連携を目的に活動している学生の組織を紹介して貰いました。

さらにリサイクル事業の現状を、ご自身の体験を交えて佐藤ヒロ子さん(有限会社佐藤商店 代表)が講演して下さいました。川井昌太郎さん(印刷博物館 学芸員)からは文京区と印刷業との独特な繋がりについて語って頂きました。

【学生の視点から】

地域環境班所属の竹尾泉さん(3年)にシンポジウム当日の感想を述べて貰いました。

「私はシンポジウムで、地域環境班を代表して演壇にたった4人のうちの一人でした。発表では1年間の調査・研究をいかにわかりやすく伝える事ができるかということに特に意識しました。なんとか発表を終えた後も、自分達の主張と実際の行動との矛盾点を指摘され、まだまだやるべき事があるということを実感しました。このシンポジウムを通して、色んな事が学べたと思います

ただ、会場手配や進行、チラシづくりなど、先生方

の力なくしてシンポジウムは成り立ちませんでした。この点について学生が受け身の姿勢になってしまったことは事実です。これからは学生が主体になってシンポジウムを運営出来ればと思います！」



【広がるネットワーク】

地域の振興と、環境問題を身近なところから解決するために、紙プロジェクトでは本学と地域とが連携する事を目指しています。今回のシンポジウムでは多くの地域の方々に参加を得て、様々なご意見、ご感想を戴く事が出来ました。そのほとんどが、興味深いもので、中には私達の活動に対する鋭いご批判もありました。このような地域と大学との間で情報発信しあえる場がある事は、学生や教員のみならず、紙に係る事業者や地域住民の皆さんにとっても有意義なものになったのではないのでしょうか。今後も地域と大学が一体となって、「地域」という視点から見る印刷業や環境問題への理解が深まるような企画・活動を進めてまいります。プロジェクトを媒介とするネットワークは、文京区を超えて確実に広がりつつあり、このネットワークの維持、さらなる充実化に努めてまいります。

Message from 紙プロ!

～ 紙プロ初の学園祭出展 ～

主な企画

2008年11月1～3日に東洋大学白山キャンパスにて第44回白山祭が開催されました。その中で、私達紙プロジェクトは「紙プロ」を多くの人にとって貰うために、様々な催し物を企画しました。白山祭に出展するのは紙プロ発足後初の試みです。初日から最終日の3日間で来場者はのべ161人。終日大盛況で終わることが出来ました。

3日目に行われた「活版印刷体験ツアー」は、印刷博物館のご厚意で実現した企画でした。白山キャンパスから江戸川橋の印刷博物館まで移動して、館内を見学した後、活版印刷を体験するというもの。実際に参加した方は、活版印刷という貴重な体験をすることができ、楽しんで戴けた様子でした。

本学学生の他に、高校生や親子連れ、地域の皆さん、また、フィールドワークでお世話になった方々にもお越しいただきました。来場された方は、紙プロの活動に興味を持ってくださる方が多く、「紙プロを知ってもらおう」という目的は達成出来たようにメンバー一同感じています。学外に向けて紙プロの活動を発信し、様々な方々に知って戴けたことで、地域連携の実現が少しずつ見えてきたのではないのでしょうか。



- ・活版印刷体験ツアー
- ・研究内容をまとめたポスター展示
- ・「裏紙ノート」の販売
- ・各国のトイレットペーパーの展示
- ・臨地調査を紹介するビデオ上映
- ・1年間の活動を追った写真展

飛び出せ! 東洋大生!

～ 紙プロジェクト公開講演会 ～

本年度は紙プロジェクト主催で、興味のある方全てに開かれた公開講演会を3度開催しました。全ての講演会に共通して「まず始めよう」「現場へ行こう」という主張が明確で、学生に主体性を持って大学生活を送る事を呼びかけたものでした。読者の皆さんも、今の生活に退屈を感じたら、外に出て、身近なところから、思い切って新しい事を始めてみましょう。必ず発見があります。もしかすると、紙プロジェクトがそのきっかけになるかもしれません。

2008年7月3日 名古屋市立大学：赤嶺淳准教授

「バナナペーパーからフェア・トレードへ——名古屋市立大学におけるモノ研究の取り組み」

教授は文部科学省による現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム「バナナペーパーを利用した環境教育（バナナ・プロジェクト）」に取り組んでいらっしゃいます。バナナプロジェクトはバナナの廃棄物として扱われる部分を利用して紙を作り、同時に生産者との交流する事を中心にして、2006年に立ち上げられました。現在は「モノを通して社会を見ること」を目標に掲げ、茶のフェア・トレード計画など、学生主体で活動しています。

2008年10月24日 早稲田大学平山都夫記念ボランティアセンター：ボルネオプロジェクトのみなさん
「学生でもできること、学生だからできること——早稲田大学ボルネオプロジェクトの挑戦」

「ボルネオプロジェクト（正式名称 海外ボランティアリーダー養成プロジェクト in ボルネオ）は上記センター内に組織されたプロジェクトの1つです。学生主導のプロジェクトで、マレーシアに住む移民や先住民の人達との交流、生活支援を目的としています。「お互いに“しあわせ”を感じる考える場を創ること」を目標に、毎年ボルネオ島に渡航し、活動しています。講演会ではインストラクターの岩井雪乃教授、学生メンバーの金田尚子さん、大林剛久さんに、「ボランティア、移民問題、本当の幸せ、自分達が現場で考えたこと」を中心に話して頂きました。

2009年1月7日 京都文教大学：松田凡教授

「学問は使って学ぶ——現場主義と実践フィールドワーク」

京都文教大学では学生の社会性とコミュニケーション能力を養う事を目的として「現場主義教育充実のための教育実践—地域と結ぶフィールドワーク教育」を実施しています。その活動実績が認められ、文部科学省による特色ある大学教育支援プログラムに選定されています。松田教授はその一環としてプロジェクト・ウオプルというゼミを2003年度から開設しています。開発援助、貧困、教育、NPO/NGO、ボランティアなどについて実践的に学ぶことを目的とし、現在はエチオピアに小学校を建てる活動が進められています。



リーダーを終えて

～2008年度活動総括～

2008年度の紙プロを率いた各班のリーダーに、この1年間を振り返ってもらった。

地域誌班：高橋良江

私たち地域誌班は、学生8名、教員3名で活動しています。私たちは文京区と紙の関わりについて、フィールドワーク調査を行っています。

今年度、私たち地域誌班は、文京区と地場産業である印刷関連業との関連性を探る上で、業界内で何度も繰り返された技術革新に焦点を当て、そこから見えてくるネットワークのありかたというテーマで研究を進めました。

最終的にはこのテーマで、成果の発表をすることができましたが、とても順調な道のりとは言えませんでした。

まずは、研究テーマを絞ることに時間がかかってしまったこと。どのような方向で調査を進めるかについて、全員が納得のいく結論に至るまで話し合いを重ねました。

そして、インタビュー調査の調整過程苦戦を強いられました。対象者とのスケジュールが合わず、やむなく依頼を断念したこともありました。ようやく、夏期休暇終盤から本格的なフィールドワークを行うことができました。

実際に外に出てみると、全員が食欲に現場の雰囲気を感じ、食欲に観察・インタビューをし、とても質の高いフィールドワークができたと感じています。普段は物静かなメンバーも、フィールドワークになると目をキラキラさせ、心から楽しんでいる様子が伝わってきました。

このメンバーで、フィールドワークやミーティング、合同合宿、白山祭への出展によって、たくさんの時間を共有し、協力し合ってきました。

シンポジウム直前は、とても過密なスケジュールの中、最終調整を行いました。心身ともに非常に辛い時期でしたが、シンポジウムを絶対に良いものにしよう、という意識が芽生え、とても良い雰囲気の中でシンポジウムを迎えることができました。とても緊張しましたが、全力を出し切ることができたので、大成功と言えるのではないで

ようか。



お忙しいなか調査活動に協力して下さった方々、心より感謝を申し上げます。ありがとうございました!!!

そして、私達を支えて下さった先生方、ありがとうございました!!!



地域環境班：河野みづき

私たち地域環境班は今年1年間、教員3名と学生9名で活動してきました。私たちの班は「紙と環境との繋がり」をテーマとしています。

今年度の活動テーマは「紙の一生」としました。これは、紙が作られてから、また再生されるまでの一連の過程を私たちの目で見てみよう、というものでした。

始動して間もない頃、私たちは何をすべきか決められずに行きました。「何かやらなきゃ!」という思いから、ひとまず現場へ行き、紙に携わっている人々から話を聞くことから始めました。

私は紙プロジェクトが発足した19年度から2年間、地域環境班で活動してきました。今年度、紙プロジェクトは学生主体で動く組織として、大きな一歩を踏み出せたと思います。

今年度の紙プロジェクトは、活動し始めた時から「学生主体で動くこと」「活動内容を引き継いでいける組織にすること」を目標としていました。そのため、文献やフィールドワークなどの調査活動を計画・実行するだけでなく、紙プロジェクトという組織の機能強化に力を入れました。

私は、今年度の一番の成果は、この組織作りができたことであると考えています。地域誌班と地域環境班だけでなく、学祭班や広報班を作り、そして各班の中の一人一人に担当役割を割り振りました。結果、自分の役割を自覚し、目標を設定し、向上心を抱くようになり、全体の活動が活発になりました。そして、これらの事が現メンバーの熱意につながっていったのではないかと考えています。

今年度の紙プロジェクトで私は地域環境班のリーダーとして活動しました。1年間、とにかく何か行動を起こし、結果を残さなければと思い、必死になっていました。最終的に組織の形ができ、また、シンポジウムを無事に終える事ができ、一安心しています。

紙プロ HP 鋭意更新中!!! 本誌にも掲載されている活動の詳細はコチラに詳しく載っています! ぜひ!

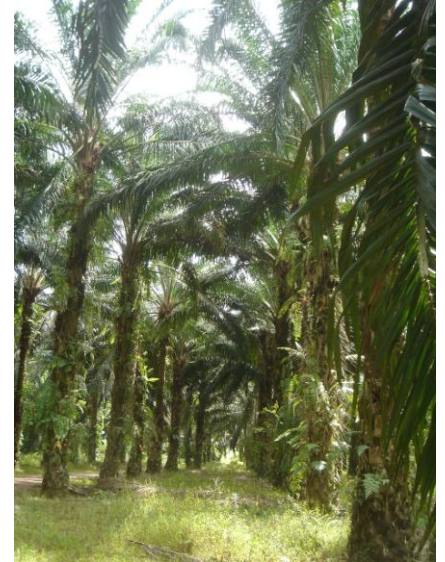
紙プロ公式ホームページ: <http://www.soc.toyo.ac.jp/culture/menu/kami%20project/kami%20main.html>

紙プロ学生ブログ: <http://kamiproject2.blog54.fc2.com/>

2008年度、地域環境班は、2008年1月に発覚した古紙配合率偽装問題の背景を探っていくうちに、「まずは紙が生産される過程から知ろう」を主な活動方針にする事に決めた。この一環で2008年12月22～24日の3日間、紙の原料である木材などの、多数のプランテーションが拓かれているマレーシアで研修・予備調査を行った。(詳細は紙プロ HP で公開予定)

【 Field Work in マレーシア】

マレーシア研修2日目の22日、今日はマレーシアの先住民、オランアスリの人々のところへフィールドワーク。目的は油ヤシとゴムのプランテーション現場を見て、村人の話を聞くこと。この村の人々は、本来は移住を繰り返す民族だった。しかし、政府はゴムの木と油ヤシのプランテーションに従事させるため、彼らを定住させた。その現場は政府の土地とされているが、元はオランアスリの人々の住んでいた場所だった。オランアスリの人々には、土地所有の概念が希薄だったため、政府に土地を取られても抵抗しなかった。オランアスリの人々はゴムの木や油ヤシの管理を任されているが、働いているのは出稼ぎに来たインドネシア人やネパール人である。単一栽培が行われているこの土地にも、かつては様々な樹木が生茂っていたらしい。それが単一化された事によって、生態系が崩れ、環境問題へと繋がる。油ヤシ栽培は、現在ゴム栽培よりも収入が良い。そのため現在は油ヤシの栽培がより活発になっている。油ヤシを原料とする植物油は、日本でも洗剤や食用油として使われている。その油は他の油に比べて「環境に良い」というイメージがあった。しかし実際の現場に行き、見て、聞いて、現実はそうではないことを知った。



【油ヤシの木】

編集メンバー 紹介

本誌は紙プロジェクト広報班が編集・製作しています。

- 小倉昇：社会文化システム1年 環境班・
広報班リーダー
HPも随時更新中です！見てください！
- 高橋良江：社会文化システム3年
地域誌班リーダー
年末から寒さにバテ気味です。夏に続き食欲不振でダイエット。
- 林貴之：社会2部2年 環境班
庭に2種ミントを植えました。ちゃんと育つと良いな。
- 竹尾泉：社会文化システム3年 環境班
新メンバー募集してます！
- 高倉和奈：社会2部2年 地域誌班
Yonda?Doll をゲットすべく読書に励みます。

学生たちの紙プロ 2008

プロジェクトリーダー：教授 植野弘子

「紙プロ」の2008年は、ようやく本格的活動を始めた年である。そして、予想しなかった成果があがり、また予想した困難に出会った年でもあった。

予想しなかった成果は、参加した学生たちの自主的な頑張りであった。地域誌班、地域環境班の2班に分かれて活動してきたが、それぞれの班ごとに異なる課題に向かって努力した。地域誌班の学生達は、担当の教員たちの提案する規定路線に疑問を感じ、自分たちは何がしたいのかを問い直した。また、地域環境班は、その場に臨んで知ろうと、学生が自主的に企画をたてた。いずれも、自ら考え「現場」から学んだことは、紙プロの目的にかなうものであった。

さらに、学園祭「白山祭」において、紙プロの学生がその活動を報告し、紙に関心をもってもらおうと行った企画はいずれも成功を収めた。また、シンポジウムでの学生の発表は、資料の緻密さと分析はまだ不十分ではあったが、「努力賞」とはいえよう。今年の予想外の成功は、「自ら動く学生」が生み出した。

対して、想定内の困難は、やはり「動かない学生」であった。紙プロは、社会文化システム学科の特徴ある教育を目指して企画されたものであった。しかし、活動を開始したところ、他学科・他学部の学生が興味をもって参加して活動を盛り上げてくれたのに対して、社会文化システム学科学生の参加状況は、満足からはほど遠い。我々の活動の広がりや問題が存在することは否めない。今年の反省に基づいた広報と勧誘の活動を、検討する必要がある。

さらに、「紙」のもつ多様な側面—紙文化、情報伝達としての紙の意味などを視野にいれて、包容力をもった企画としての紙プロを考えていくことが求められよう。